

強制は行為を免責するか

太田 雅子 (Masako Ota)

東洋大学非常勤講師

ドラジェン・エルデモヴィッチはボスニア・ヘルツェゴビナ紛争中にボスニア・ヘルツェゴビナのスレブレニツァで1995年7月に発生した大量虐殺事件の際に70人からおおよそ150人余りのムスリムを虐殺し、人道に反する罪に問われた。有罪抗弁の際にエルデモヴィッチは、その大量虐殺が上官による脅迫的な強制によって実行せざるを得なかったことを述べた。曰く、「この虐殺に加わらなければお前の家族もお前自身の命も危機に陥ると思え」。エルデモヴィッチは妻と小さな子供の命を守るためにやむをえず虐殺に加担したのであった。

以前にこの題材をとりあげたときは、「責任の有無は相手との距離の近さに起因する」とするスキャンロンの主張をベースにしたエルデモヴィッチの免責について扱ったが、その際は「強制」の果たす役割に関してほとんど取り上げていなかった。しかし、この残虐行為にどのような責任が問われるかどうかは「強制」を抜きにして考えることはできない。

本発表では、上官による強制はエルデモヴィッチの大量虐殺に対する道義的責任を軽くすることができたのかを考える。ひとつの考え方として、エルデモヴィッチの行為に強制を考慮することで責任を軽減できるとすれば、「自由を奪われていたから」というものがある。上官の命令に従わなければ家族の命も自分の命も奪われる。服従を選ぶ以外に助かる道はないという意味で、彼の他行為可能性は奪われていた。有責性の対象となるのは、ある程度自由に行為できる行為者である。行為者がどの行為を「選んだか」によってその後に起きる出来事に対する責任の有無が決まると考えられるからだ。しかし、エルデモヴィッチには自由はない。ゆえに責任や非難を課するのは困難である、という考え方はできるだろう。

もっとも、上官の命令に逆らう自由はあっただろうという見方もできる。家族も自分も犠牲にしてまで虐殺には決して関与しないという決意があれば、例えばムスリムたちの列に並んで、「自分を撃て」と宣言する自由はあるかもしれない。しかしその場合、エルデモヴィッチが射殺されることは確実であり、その場合もやはり大虐殺は起こり多数のムスリムが亡くなるだろう。エルデモヴィッチの行為は勇敢であると讃えられることはあっても大虐殺にはなんの影響も与えることができず、先程とは異なる理由で責任を問うのは困難となる。

例えば Chiesa, 2008 では、エルデモヴィッチに対する①事件に関わっていない民衆の感覚：強制は抗弁になりうる、と② Casasse 裁判官の見解：強制は正当化と抗弁とのどっちつかずの状態であるという二つの見解を比較し、事件の法的判断と道徳的（一般的な感覚としての）判断の違いを鮮明にしている。また、Turns, 1998 では裁

判の内容を詳細に記述したなかで、エルデモヴィッチが「戦争犯罪」と「人道における罪」の違いを理解していなかったようだとする記述が見受けられる。これらの文献を参照し、エルデモヴィッチの戦争の罪がどのようなものであったかさらに明らかにした上で、そこで「（どうしても逆らうことができない）強制」が彼の責任を軽減しうるのかどうかを、道徳的側面と法的側面の両方から探っていく。

しかし、同様の強制が行われたのはスレブレニツァの虐殺だけではあるまい。戦争の行われるところ、常におそらく多くの戦場で起きていただろう。人命にかかわる戦時下の「強制」による行為が法的・道徳的にどのように扱われるべきかについてのひとつの見解を提案する。無論、そこでは「人道における罪」とは何かを考慮に入れる必要がある。

そして、もし「強制」に責任軽減の効果があるのだとしたら、日常的な強制、たとえば仲間のうち弱そうな人を相手に「万引きをしなければひどい目に遭わせるぞ」という意味の強制との共通点および相違点は何なのだろうか。「命令に逆らえばよい」

（少なくともエルデモヴィッチの境遇よりは逆らうのは容易だろう）という見解もあるだろうが、命令に逆らってその後ずっと付きまとわれて暴力行為を受けるのであれば、たとえ責任は免れても彼がたどる運命は、戦争裁判にかけられないだけでエルデモヴィッチとさほど変わらないようにも思える。本発表では、エルデモヴィッチの例と日常的な強制の例およびその考察を参照しつつ、強制されて不正な行為に及んだ行為者に帰されうる法的・道徳的責任のありかたを考える機会を提供したい。

文献

Chiesa, L. E. (2008), 'Duress, Demanding Heroism and Proportionality: The Erdemovic Case and Beyond,' <http://digitalcommons.pace.edu/lawfaculty>

Turns, D. (1998), 'The International Criminal Tribunal for the Former Yugoslavia: The Erdemovic Case', *The International and Comparative Law Quarterly*, 47-2, 461-474.